

令和7年度 インターネット上の偽・誤情報等への対策技術の開発・実証事業

偽・誤情報の判別に知識および認知的熟慮が及ぼす影響

成果報告書 概要版

2026/3/19

研02_中央大学

目次

1. 研究・調査の背景・目的

1. 研究・調査によりアプローチする課題・目指す姿
2. 研究・調査により期待される偽・誤情報対策への効果

2. 研究・調査の実施

1. 研究および有効性等に関する検証の全体像
2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. 研究・調査の考察・今後に向けた課題等

1. 研究・調査の総合的な考察
2. 研究・調査にあたっての課題・展望

目次

1. 研究・調査の背景・目的

1. 研究・調査によりアプローチする課題・目指す姿
2. 研究・調査により期待される偽・誤情報対策への効果

2. 研究・調査の実施

1. 研究および有効性等に関する検証の全体像
2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. 研究・調査の考察・今後に向けた課題等

1. 研究・調査の総合的な考察
2. 研究・調査にあたっての課題・展望

1-1. 研究・調査によりアプローチする課題・目指す姿

研究・調査によりアプローチする課題

- 近年の偽・誤情報に惑わされてしまう反応の一部は、確認バイアスや認知的流暢性などの、人間が持つ認知バイアスによって説明できる。つまり、熟考せずに反射的な反応をしてしまう、「システム1」の影響（D.カーネマン著村井章子訳『ファスト&スロー』ハヤカワ書房）である。
- 偽・誤情報に関する近年の研究では、「認知的な努力」が正誤判断にもたらす影響が注目されている。例として Pennycock & Rand(2019)は、認知反射テストの得点が偽・誤情報の判別と正の相関を示すことを指摘した。
この結果は、イデオロギーや能力よりも、「認知的な怠惰さ」が偽・誤情報への脆弱性をもたらすことを示している。
- 以上を踏まえ本研究では、（1）ウェブ調査によって、偽・誤情報への接触状況と、それを規定する社会的・個人的属性及び政治意識との関連を検討するとともに、（2）サーベイ実験で認知的反射テストを熟慮の操作として用いることで、「熟慮」が偽・誤情報の正誤判断に及ぼす影響について検討を行う。

上記課題を踏まえ目指す姿・ゴール

- 本研究の主要な目的は、次の2点である。
- ① ウェブ調査により、偽・誤情報に接触しやすい個人的・環境的要因を検討する。
- ② サーベイ実験により、認知反射テストへの取り組みが、熟慮による正誤判断の向上を促すかどうかを検討する。
- また、偽・誤情報が拡散する社会への対応を考えるうえでは、認知反射テストおよび政治的知識に関する設問の正解率も重要な知見となる。先行研究では、有権者の政治的知識が少ないこと、一般に人間は認知的負荷のかかる作業を嫌い、直観的な判断に頼りやすいことなどが指摘されている。私たち人間のこうした傾向は、偽・誤情報への気づきを妨げる要因となるだろう。

1-2. 研究・調査により期待される偽・誤情報対策への効果

研究・調査により期待される偽・誤情報対策への効果

- (1) 偽・誤情報啓発活動への示唆
 - ① 啓発活動のターゲットの明確化
 - 若く、ネットを情報源としている人ほど偽・誤情報に接しやすいということから、引き続き、学校など教育現場での啓発を促進することが求められる。
 - ② 政治や制度への提言
 - 社会への不安や政治的疎外意識が高い人ほど偽・誤情報に接しやすく、また信じやすいという結果は、**偽・誤情報拡散の根本的な原因の一つは、社会や将来に対する不安や疎外感である**ことを示唆している。
 - つまり、根本的には、政治や制度、専門家に対する信頼の回復が重要となる。たとえば、「問題や悪は公正に対処される」という信頼があれば、偽・誤情報の影響力は限定的となる。
 - 啓発活動としては、同時に、そうした不安を利用する動きへの注意喚起が求められる。
 - ③ リテラシー教育の改善
 - 批判的思考態度や「情報裏どり傾向」は、偽・誤情報への接触に正の効果を示していた。とくに批判的思考態度は、偽・誤情報の受容（本当かもしれないと思うこと）にも正の効果を持っていた。
 - この結果は、「公平に、いろいろな考え方を知ろう」「裏付けを探そう」という努力が、場合によっては偽・誤情報への接触を促進してしまう可能性を示唆している。情報を探すほどかえって惑わされることは先行研究でも指摘されているので（Aslett et al.2024）、引き続き、「見分けることはすぐには難しいので、まず態度を保留する」ことを強調することが求められる。その意味で、「騙されないという自信が危険」ということを強調した総務省のリテラシー教材「インターネットとの向き合い方～ニセ・誤情報にだまされないために～第2版」の方向性は妥当。
- (2) ネット環境における反射的な行動や政治的知識の低さへの理解
 - サーベイ実験により、認知的反射テストおよび政治的知識の正解率は必ずしも高くない（各問2～3割前後）ということがわかった。まず、**ネットユーザの多くは面倒な認知的処理を行わずに、また十分な政治的知識を持たずに情報に接しているということを前提とする必要**がある。

目次

1. 研究・調査の背景・目的

1. 研究・調査によりアプローチする課題・目指す姿
2. 研究・調査により期待される偽・誤情報対策への効果

2. 研究・調査の実施

1. 研究および有効性等に関する検証の全体像
2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. 研究・調査の考察・今後に向けた課題等

1. 研究・調査の総合的な考察
2. 研究・調査にあたっての課題・展望

2-1. 研究および有効性等に関する検証の全体像

研究および有効性等に関する検証の全体像

以下の調査・サーベイ実験は、クロスマーケティング社のウェブ調査作成・配信サービス「qiqumo」を用いて実施した。

(1) ウェブ調査

- 目的：偽・誤情報に接触しやすい、また事実と判断しやすい個人的・環境的要因を検討する。
- 20～69歳の登録モニタ、有効回答数2500（2020年国勢調査の性別・年齢別構成比に基づき割り付け）
- 主要な項目：社会的属性（性別、年齢、学歴、所得、職業、居住地）のほか、①政治的関心、②政治的知識、③政治的イデオロギー自己定位、④メディア接触（テレビ、新聞、SNSなど）⑤情報への態度、⑥社会への不安、⑦自尊感情、⑧批判的思考態度など。
- 2025年に拡散された偽情報を8つ提示し、「接触したか」「信じたか」「周囲やネットで話題にしたか」を質問。

(2) サーベイ実験1

- 目的：認知的反射テストへの取り組みによる「熟慮」が偽・誤情報判断に及ぼす影響を検討する。
- 20～69歳の登録モニタから、性別×年代別で60人ずつを均等割り付け。サンプル数N = 600。
- ①認知的反射テスト(Frederick, 2005)に取り組むだけのグループ、②認知的反射テストの後に正解と考え方のフィードバックを与えるグループ) と取り組まないグループ、の3群に、誕生日で疑似ランダムアサインメントを行う。
- 認知的熟慮テストの後、偽情報の正誤判断課題（事実9，偽・誤情報7）を提示。

(3) サーベイ実験2

- 目的：回答者の持つ政治的知識と認知的反射テストによる「熟慮」の交互作用について検討する。
- 20～69歳の登録モニタから、性別×年代別で81人ずつを均等割り付け。サンプル数N = 810。
- 個人特性として、「政治知識」も測定する。
- ①認知反射テストへの回答（有・無）、②フィードバックの有無、③提示ニュースの数（17本・9本）
→誕生日で6群に疑似ランダムアサインメント。

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

1. ウェブ調査 (p.1)

- 2025年12月5日～6日にかけて実施。回収サンプルの目標数は2020年国勢調査から年代・性別で割り付け。

1. 偽・誤情報への接触

- 提示した7つの偽・誤情報への接触状況は図1-1に示すとおりである。**回答者の約6割がなんらかの偽・誤情報に接触していた**。「2025年7月に大災害が起きる」について回答者の50.8%が「見聞きした」と答えた。次いで「JICAがアフリカ・ホームタウン計画で大量のアフリカ人移民を受け入れる」(22.1%)、「2026年から、独身者のみから子ども・子育て支援金(独身税)が徴収される」(17.0%)の接触率が高かった。これらの情報はテレビなどのマスメディアでも紹介されていた(偽情報への注意喚起も含む)ことが高い認知率の一因かもしれない。
- 一方、**いずれかの偽・誤情報を「本当かもしれないと思う(思った)」という回答者は約3割**であった。

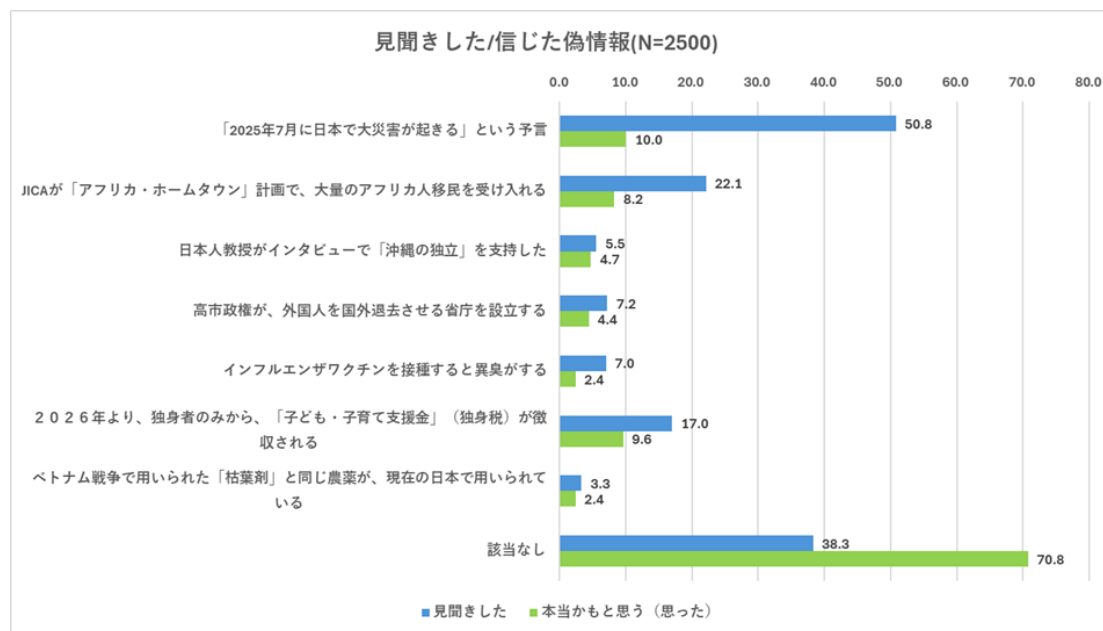


図1-1. 見聞きした/信じた偽情報

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

1. ウェブ調査 (p. 2)

2. 見聞きした・信じた偽・誤情報の規定要因

- 見聞きした偽・誤情報の数および、信じた偽・誤情報の数を従属変数とするポアソン回帰分析の結果 (要約)

	見聞きした	信じた情報
性別(1:男性、2:女性)	(+)	+
年齢	▼	▼▼▼
大学歴ダミー		
(1)テレビで政治ニュースを見る	+	▼▼
(2)新聞で政治記事を読む	+++	+++
(3)ネット上で政治ニュースを見る	+++	+++
(4)ネット上で政治に関する他の人の意見を見る	+++	+++
(5)ネット上で政治について発言をする		+++
(6)動画サイトを見る	+	
(7)ソーシャルメディア・SNSを利用する	+++	(+)
政治知識	+	
自尊感情	(▽)	
批判的思考態度	+++	+
不安	++	++
政治的疎外感	+++	+++
q22因子1:情報裏どり傾向	+++	
q22因子2:面白拡散傾向	▼▼▼	+++
q12因子1:リベラル的価値観		▼
q12因子2:保守的価値観	++	+++

正の効果

+++ p<.001

++ p<.01

+ p<.05

(+) p<.10

負の効果

▼▼▼ p<.001

▼▼ p<.01

▼ p<.05

(▽) p<.10

注：p値とは「有意水準」=「効果がない、という帰無仮説を棄却したときにそれが誤りである確率」。これが小さい(5%=0.05未満)のとき、「統計的に有意」とする。つまり、p値が小さいほどその変数が「見聞きした/信じた情報数」に影響力があるということ。

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

1. ウェブ調査 (p. 3)

2. 見聞きした・信じた偽・誤情報の規定要因 (まとめ)

見聞きした偽・誤情報の数
負の効果 年齢(若い)、面白拡散傾向
正の効果 テレビニュース、新聞接触、 ネットニュース接触、ネットで他の人の意見、動画サイト、SNS 政治的知識、批判的思考態度、不安、政治的疎外感 情報裏どり傾向、保守的価値観
信じた偽・誤情報の数
負の効果 性別(女性)、年齢(若い)、テレビニュース、リベラル的価値観
正の効果 新聞接触、ネットニュース接触、 ネットで政治に関する他の人の意見、ネットで発言 批判的思考態度、不安、政治的疎外感 面白拡散傾向、保守的価値観

■ **偽情報接触にはネットに加えてマスメディア接触も有意**→複数のメディアで拡散されるためではないか。一方、テレビニュースが「**信じた偽・誤情報の数**」に負の効果を示しており、マスメディアによる啓発にも効果があった可能性。

■ **批判的思考態度や情報裏どり傾向は偽情報接触到に正の効果。批判的思考態度は偽情報を「信じる」にも正の効果。**→自分から情報接触して確認しようとする行為が、場合によっては偽・誤情報への接触を促進する。

■ 「面白がって拡散しようとする」傾向は、偽情報への接触には負の効果だが、信じることには正の効果。

■ 政治的知識があることは、偽情報への接触自体は必ずしも抑制しない。

■ **不安、政治的疎外感**は偽・誤情報への接触を促進し、信じる傾向を高める。

■ 保守的価値観が負の効果→今回題材として用いた偽・誤情報に、外国人に関連するものが多かったことを反映している可能性。(イデオロギー自体の効果というより、**確認バイアスの影響と考えられる**)

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

2. サーベイ実験 (1) p.1

【目的】

- 偽・誤情報を信じてしまうのは、確認バイアスなどの自分の信念に沿った推論というより、認知的努力の欠如によって説明されるという指摘がある(Pennycook and Rand,2019)。そこで本研究では、認知反射テストへの取り組みおよび「正解の提示」により、偽・誤情報と事実の判断の正確さが向上するかどうかを検討した。
- (仮説) 認知的反射テストへの取り組みとフィードバックは、熟慮を促進し、情報の正誤判断の正確性を高めるだろう。

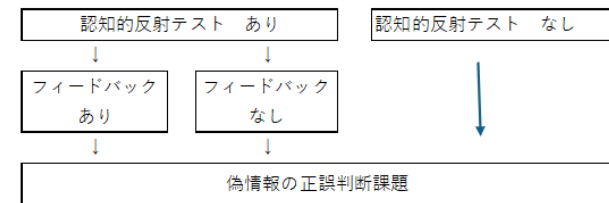
【実験デザイン】

- 「誕生日の末尾の数字」によって疑似ランダムアサインメントを行い、次の3群にわけた。
 - ① 「認知反射テストあり+ 正解フィードバックあり」(N=175)
 - ② 「認知反射テストあり+ 正解フィードバックなし」(N=220)
 - ③ 認知反射テストなし (コントロール群) (N=205)
- 1年程度以内にネット上で拡散した「偽・誤情報」の見出し9本、「事実報道」の見出し7本を提示し、「見聞きしたもの」「本当かもしれないと思ったもの」を選択してもらった。なお、これら計16の情報、回答者ごとにランダムに提示した。

【認知反射テスト】

- 認知的反射テスト(Frederick 2005)とは、次のような問題である。
- 【第1問】1本のバットと1つのボールが合わせて11000円します。バットがボールより10000円高いとすると、ボールはいくらですか (**正解率19.7%**)。*コントロール群除く
- 【第2問】あるおもちゃを5つ作るのに5台の機械で5分かかります。では100台の機械で100個のおもちゃを作るのに何分かかりますでしょうか (**正解率33.2%**)。
- 【第3問】ある池がスイレンの葉におおわれています。スイレンの葉は、毎日2倍に広がって池を覆っていきます。スイレンの葉が池全体を覆いつくすのに48日かかるとすると、池の半分を覆うのに何日かかるでしょうか(**正解率19%**)。

実験1：認知的反射テストの効果



2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. サーベイ実験 (1) p.2

- 提示した9つの偽・誤情報および7つの事実報道と、「見聞きした」「本当かもしれないと思った」の言及率を図2-1に示す。最も多くの人々が接していた偽・誤情報は「2025年7月に大災害」とあり、**全体の約6割が何らかの偽・誤情報に接していた**。このうち、「外国人による犯罪の検挙件数は2004年をピークとして横ばい」については、正しくは「検挙人員数が2004年ピーク、件数は2005年ピーク」であったため、以降の集計からは除外した。

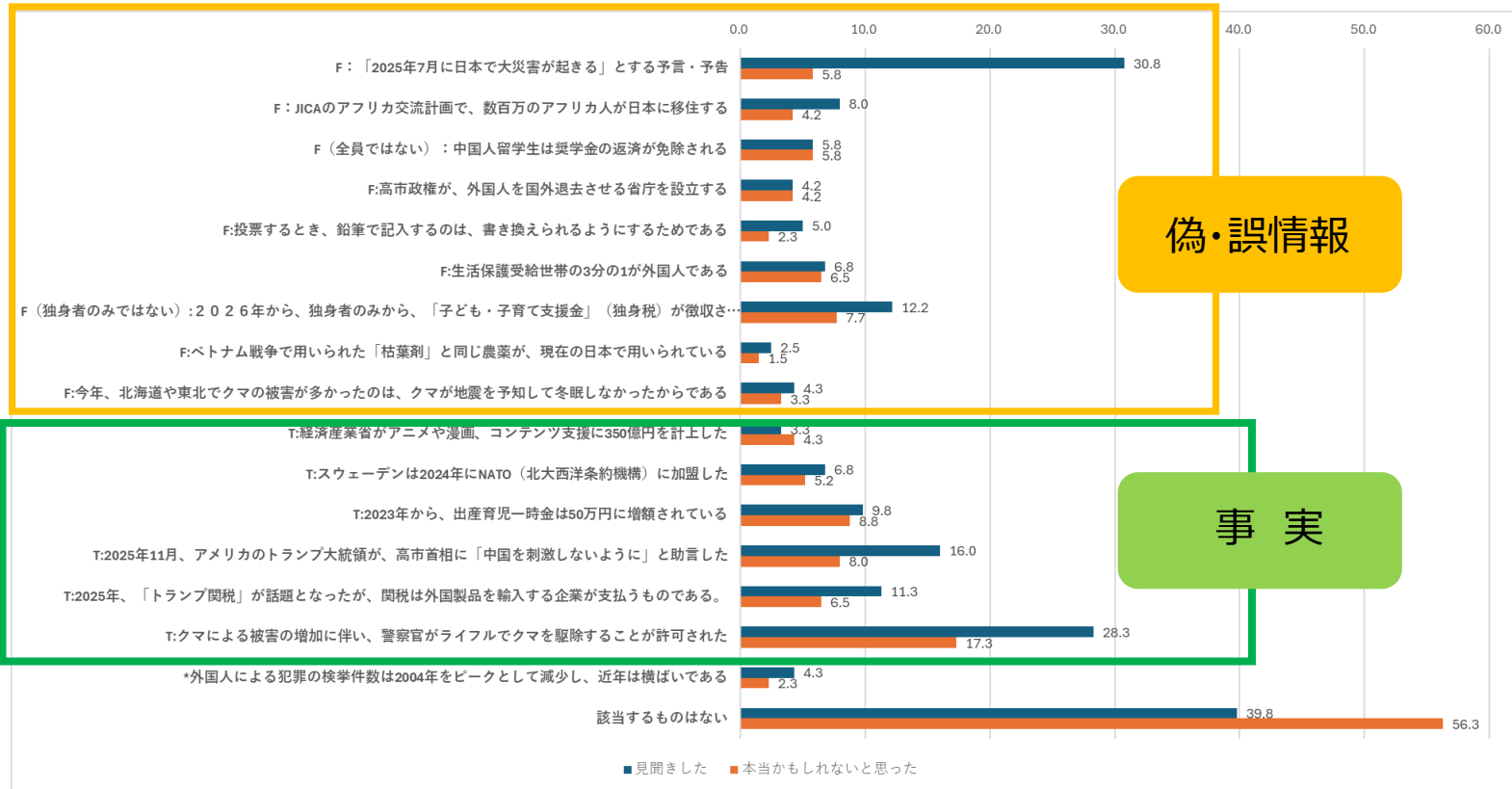


図2-1. 見聞きした偽・誤情報及び事実報道 (N = 600)

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. サーベイ実験（1） p.3

- 次に、実験条件ごとに「見たことがある偽・誤情報」「本当かもしれないと思った偽・誤情報」「見たことがある事実情報」「本当かもしれないと思った事実情報」の言及数の比較を行った。

【① 見聞きした偽/誤情報】

- 「認知テスト+フィードバックあり群」「認知テスト+フィードバックなし群」「コントロール群」によって、「見聞きした偽・誤情報（9つ）」の言及数に差がみられるかどうかを検討するため、Kruskal-Wallis 検定を行ったところ、有意差は見られなかった ($H(2)=1.481, p=.477$)。

【② 見聞きした事実情報】

- 「見聞きした事実情報（6つ）」の言及数についてKruskal-Wallis 検定を行ったところ、群間に有意差が認められた ($H(2)=8.097, p=.017$)。Dunn-Bonferroni法による多重比較の結果、「FBあり群> FBなし群、コントロール群」の間に有意差が見られた($p<.05$)。
- 結果として、仮説は、支持されなかった。
- ただし見聞きした事実情報の数では効果が見られた。

「見聞きした事実」言及数は全体的に少ないが、フィードバックあり群では中央値が有意に大きい

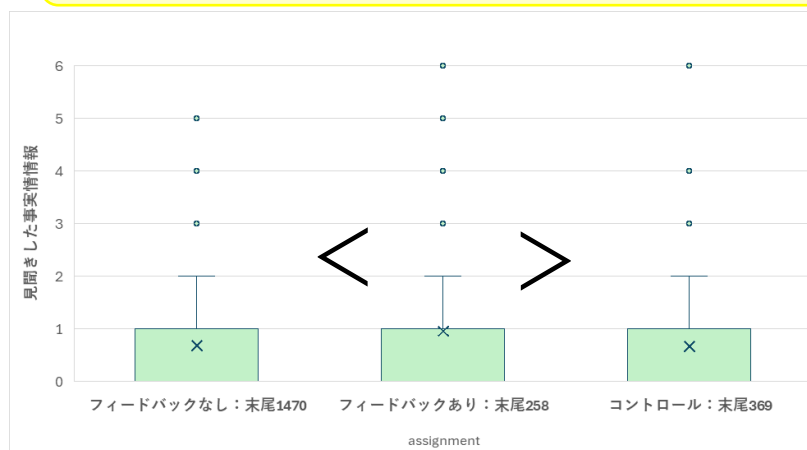
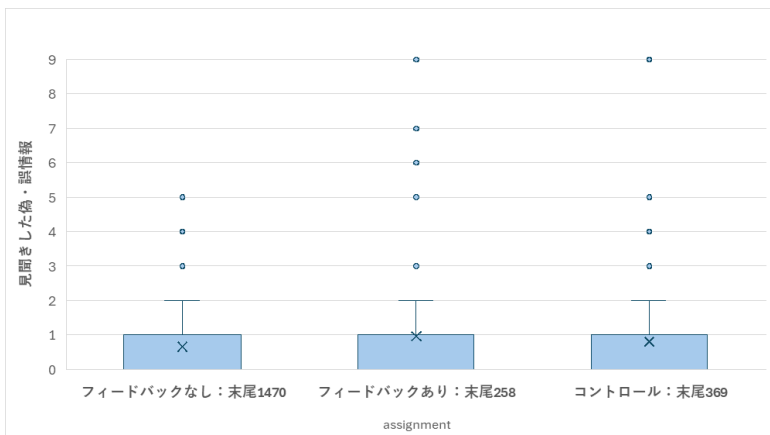


図2-3.見聞きした情報言及数（左：偽・誤情報、右：事実）×は中央値

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. サーベイ実験（2） p.1

【研究デザイン】

- クロスマーケティング社「qiqumo」を用いてウェブ調査形式で実施。
- 20～69歳の登録モニタから、性別×年代別で81人ずつを均等割り付け。サンプル数N = 810。
なお、実験1に回答したことのあるモニタは配信対象から除外した。
- 「誕生日の月」で疑似ランダムアサインメントを行う。
- ① 認知反射テスト（3問）への取り組み
- ② フィードバック（正解）の提示：サーベイ実験1では3問まとめて正解を提示したが、サーベイ実験2では、1問取り組むごとに解を提示した。
- ③ 提示する情報の数正誤の判断をしてもらうニュース・情報について、「多く提示するグループ（17本）」「少なく提示するグループ（9本）」の2つの条件を設定。
- 以上により、回答者を、図3-1のような6群にわけた。

【仮説】

- **仮説1**：認知反射テストへの取り組みおよびフィードバックは、偽・誤情報の正誤判断を促進するだろう。
- **仮説2**：認知反射テストの効果は、政治知識のある層でより強く出るだろう。

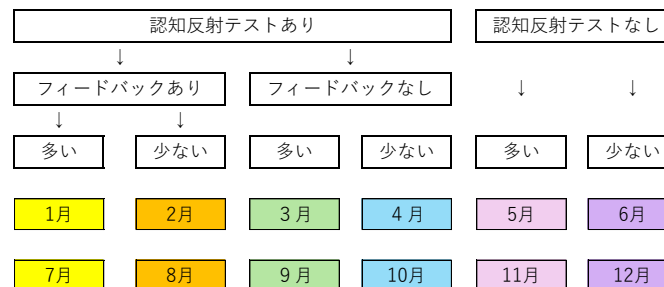


図3-1. サーベイ実験2のデザイン

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. サーベイ実験（2） p.2

【政治的知識】

政治的知識は以下の3つの設問で測定した。

- **【設問 1】** 日本において、国の予算を国会に提出する権利を持つのはどこだと思いますか。（4択＋わからない）
正解率34.8%
- **【設問 2】** 1月16日、2つの政党が選挙協力するにあたって、新党「中道改革連合」を結成したという報道がありました。この2つの政党がどこをご存じですか。（政党名から2つを選択）
正解率54.3%
- **【設問 3】** 衆院で可決された法案が参院で否決された場合、衆院で再審議になります。そのとき法案が成立するためには、衆議院出席議員のうち、どのくらいの割合の賛成が必要になるとと思いますか。（4択＋わからない）
正解率30.6%

【認知反射テスト】

* 政治的知識設問の後に配置したためか、実験1よりも正解率が向上していた。

- **【第 1 問】** 1本のバットと1つのボールが合わせて11000円します。バットがボールより10000円高いとすると、ボールはいくらですか（**正解率25.7%**）。* 認知反射テストを受けた回答者（n=541）のみ
- **【第 2 問】** あるおもちゃを5つ作るのに5台の機械で5分かかります。では100台の機械で100個のおもちゃを作るのに何分かかりますでしょうか（**正解率40.5%**）。
- **【第 3 問】** ある池がスイレンの葉におおわれています。スイレンの葉は、毎日2倍に広がって池を覆っていきます。スイレンの葉が池全体を覆いつくすのに48日かかるとすると、池の半分を覆うのに何日かかりますでしょうか（**正解率26.2%**）。

2-2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. サーベイ実験 (2) p.3

- サーベイ実験2で提示した情報は以下の通り (ここでは多数条件のみ提示)

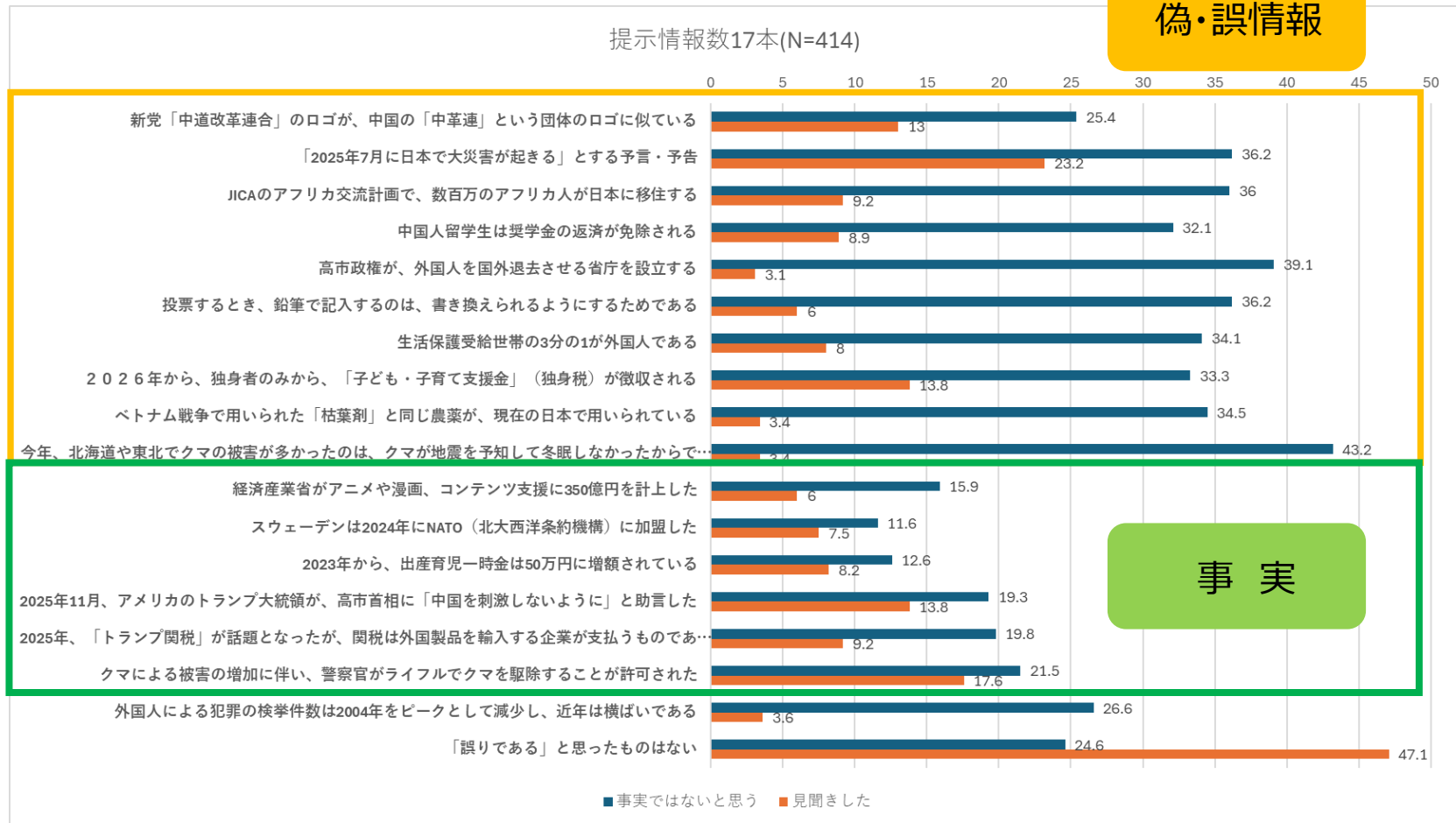


図3-2. 疑った/見聞きしたニュース (17本、N=414)

3-2. 研究の個別詳細

3. サーベイ実験 (2) p.4

【分析結果】

- 「疑った偽・誤情報の数 (10本条件、5本条件)」および「疑った事実情報の数」(6本条件、3本条件) を従属変数とする負の二項回帰およびポアソン回帰分析を行った (どちらを適用するかは従属変数の平均値と分散で判断)。
- 独立変数は、「政治知識」「認知反射テスト+FBあり」「認知反射テスト+FBなし」の主効果、および「政治知識×認知反射テスト+FB」「政治知識×認知反射テストFBなし」の交互作用である。
- その結果、提示数の多い(10本)条件での「疑った偽・誤情報」の数でのみ、政治知識と認知反射テスト+FBの交互作用が見られた。政治知識がある層では、認知反射テストとFBを受けることによって、「偽・誤情報を正しく疑う数」が増える。(仮説1、仮説2の部分的支持)
- すべての条件で、政治的知識の主効果が有意であり、「知識があること」は、偽・誤情報を正しく判断することを促進するとともに、事実に対しても批判的な(疑う)傾向を促進すると考えられる。
- ただし、政治知識が3点かつ認知反射テストとFBを受けた層は該当者が少なく (n=17) 過剰な一般化は注意すべきである。

表3-1. 「疑った偽情報の数 (11本中)」を従属変数とする負の二項回帰分析

	B	SE	Waldchi-sq	p	Exp(B)
(切片)	0.58	0.1658	12.237	<.001	1.786
政治知識	0.369	0.0973	14.368	<.001	1.446
認知テストFBあり	-0.481	0.2499	3.701	0.054	0.618
認知テストFBなし	-0.048	0.2359	0.041	0.84	0.954
政治知識×FBあり	0.3	0.1497	4.002	0.045	1.349
政治知識×FBなし	0.105	0.1503	0.484	0.487	1.11
N	408				
deviation/df	1.076				
chi-sq/df	0.848				
AIC	1820.436				
BIC	1844.592				

* 従属変数の平均値と分散から、負の二項回帰モデルを適用した。

* 参照カテゴリは統制群 (認知反射テストなし) となる

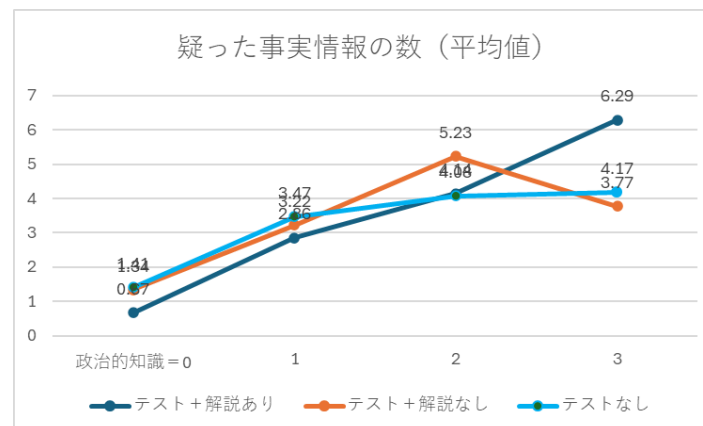


図3-3. 政治知識と認知反射テスト・FBの交互作用

3-2. 研究の個別詳細

3. サーベイ実験 (2) p.5

【認知反射テストと偽情報の判断】

- 認知反射テストを受けたグループについて、認知反射テストの正解数を独立変数、「疑った偽・誤情報の数（10本条件、5本条件）」および「疑った事実情報の数」（6本条件、3本条件）を従属変数とするクラスカル・ウォリス検定を行った（図3-4, 図3-5、エラーバーは95%信頼区間）。
- その結果、**認知反射テストの正解数が多いほど、「偽・誤情報を正しく疑う数」が増えるという結果が得られた。**（5本条件では、0点 = 1点 < 2点、3点、10本条件では、0点 < 1点 < 2点、3点）
- ただし、正解数が多い回答者（3点）は、「疑った事実ニュース」の数も有意に多かった（0, 1点との間に有意差）
- この結果は、認知反射テストに正解できる = 熟慮する回答者は、提示された情報に懐疑的になることができることを示唆している(Pennycock and Rand, 2019)。**

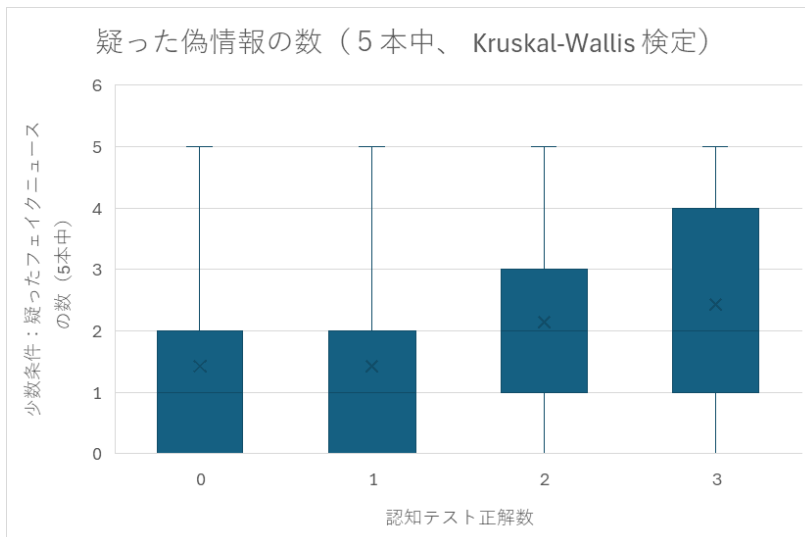


図3-4. 認知反射テスト正解数と疑った偽・誤情報（5本条件）

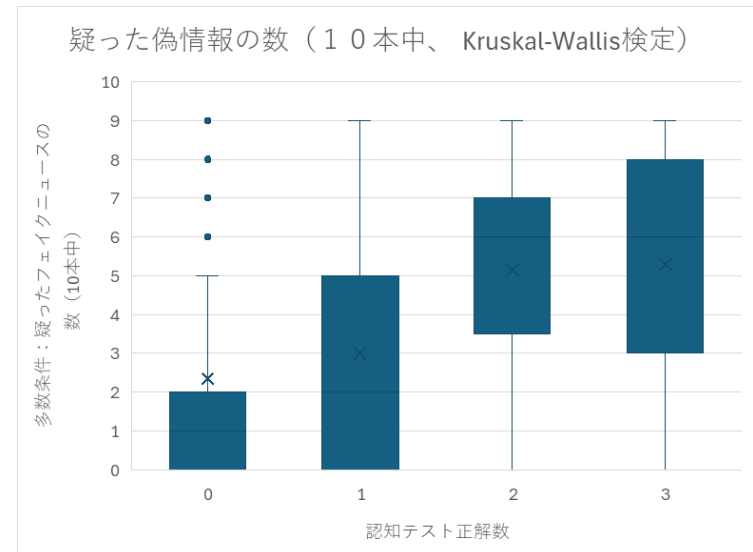


図3-5. 認知反射テスト正解数と疑った偽・誤情報（10本条件）

3-2. 研究の個別詳細

4. まとめ

- 本研究の中心的な結果を要約したものが下図である。
- メディア接触や批判的思考態度、不安、政治的疎外感などが、偽・誤情報の信じやすさと関連していると同時に、ネット上での情報接触における認知的な努力、および政治的知識とその相互作用の影響が示唆された。

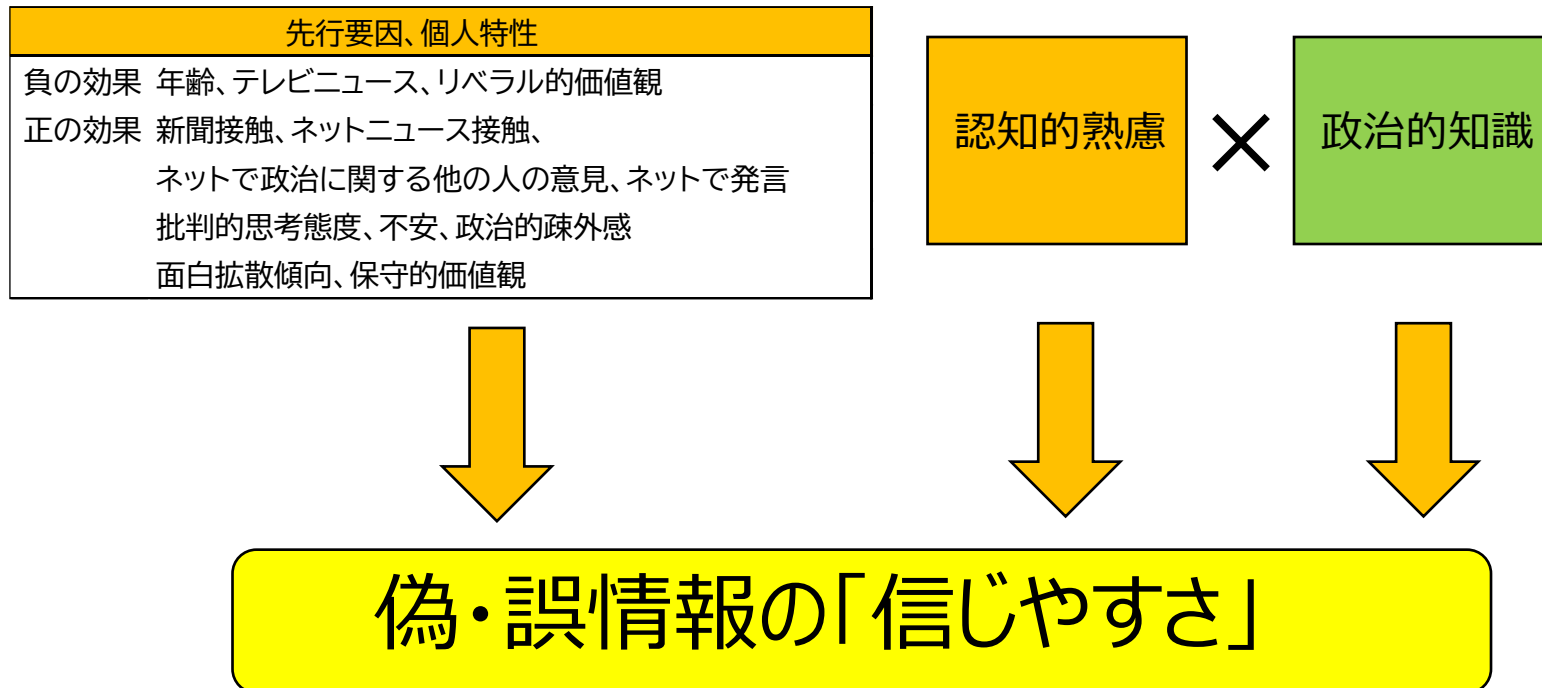


図3-6. 本研究のまとめ

目次

1. 研究・調査の背景・目的

1. 研究・調査によりアプローチする課題・目指す姿
2. 研究・調査により期待される偽・誤情報対策への効果

2. 研究・調査の実施

1. 研究および有効性等に関する検証の全体像
2. 研究および有効性等に関する検証の個別詳細

3. 研究・調査の考察・今後に向けた課題等

1. 研究・調査の総合的な考察
2. 研究・調査にあたっての課題・展望

3-1. 研究・調査の総合的な考察

研究・調査の総合的な考察

【ウェブ調査】

1) 偽・誤情報への接触

- ・提示した7つの偽・誤情報への接触状況を見ると、回答者の約6割（61.7%）がなんらかの偽・誤情報に接触していた。ただし「見聞きした偽・誤情報」の平均値は1.14(SD=1.27)であり、一人当たりの接触数は多くはない。
- ・一方、いずれかの偽・誤情報を「本当かもしれないと思う（思った）」という回答者は約3割（29.2%）で、7割（70.8%）は「信じたものはない」と回答していた。

2) 偽・誤情報接触の規定要因

- ・ ① **若く、ネットを情報源としている人ほど偽・誤情報に接しやすい。伝統的メディアも情報源。**
ただし、「信じた偽・誤情報」についてはテレビニュース接触が負の関連を示しており、偽・誤情報への注意喚起が一定の効果を持っていた可能性がある。
- ・ ② **社会への不安や政治的疎外意識が高い人ほど偽・誤情報に接しやすく、また信じやすい。**
偽・誤情報の影響を抑制するには、政治や社会システムへの信頼の回復が重要。
- ・ ③ **批判的思考態度や「情報裏どり傾向」は、偽・誤情報への接触に正の関連を示していた。**
「様々な意見を知ろう」「裏付けを探そう」という努力が、場合によっては偽・誤情報への接触を促進する可能性も。

【サーベイ実験 1, 2】

- ・ 認知反射テストの正解率は各問3割前後と高くない。
- ・ 政治的知識をたずねる設問の正解率も各問3割前後と高くない。
- ・ **→ネットユーザの多くは、面倒な認知的処理を行わずに情報に接していること、また、政治にあまり関心や知識がないことを前提とする必要がある。**

3-2. 研究・調査にあたっての課題・展望

研究・調査にあたっての今後の課題

- 社会への不安や政治的疎外意識が高い人ほど偽・誤情報に接しやすく、また信じやすい。
- 批判的思考態度は、偽・誤情報への接触および受容に正の効果を示していた。この結果は、リテラシー教育において、「自ら情報を確認しよう」という呼びかけだけでは不十分な可能性を示唆している。
- **認知反射テストの正解数が多いほど、偽・誤情報の判断数が多くなっていた。**この結果は、「もともと熟慮傾向のある人は熟慮する」ということに他ならないが、**正解数が多くないことを踏まえると、「熟慮してネット情報を見る人はそもそも多くない」という重要な事実を示している。**
- 一方、**認知反射テストへの取り組み（あるいは+フィードバック）だけでは、偽・誤情報の判断に対して有意な効果は見られなかった。**ただし、**①認知反射テスト+FBが事実情報の想起を促進する効果（実験1）と、偽・誤情報判断に対する政治的知識と認知反射テストへの取り組みへの交互作用（実験2）が見られた。**この結果は、もともと政治への知識がある（関心がある）人にとっては、認知反射テストへの取り組みが、熟慮を促した可能性を示唆している。一方で、政治的知識と認知的反射テストの得点には弱い正の相関があるため（Tau $b=.303$ ）、これが影響した可能性もある。

上記課題を踏まえた今後の展望

- 認知反射テストへの取り組みそのものが偽・誤情報判断の正解率を向上させるという明確な知見は得られなかったが、認知反射テストの得点が高いほど、偽・誤情報判断が正確になるという傾向はみられた。また、認知反射テストの正解率が全体として低いということも確認された。「どうすれば熟慮が促進されるのか」という課題は依然残ってしまったが、「**私たちネットユーザは、ネット上の情報を必ずしもきちんと見ておらず、じっくり考えることもしない**」**ことを示したという点では非常に貴重なデータと言えよう。**ネットリテラシーの啓発活動は、「偽情報」の拡散以前に、**まず情報が必ずしも深く処理されていない、という点に留意して進める必要がある。**
- ウェブ調査では、社会への不安や政治的疎外意識が高いほど偽・誤情報に接しやすいこと、一方で、批判的思考態度は偽・誤情報への接触・受容に正の効果を示すことが見出された。**この結果は、「社会への不安」や「疎外感」を煽る情報への注意喚起が必要であることを示すと同時に、（ユーザが自ら探しに行くだけではなく）「信頼できる情報源」をどう提示するか、その情報源に対する信頼をどう獲得するかということが最重要課題であることを示唆している。**